

研究だより

八甲田山の植物群落

弘前大学 郡 場 寛

八甲田山は植物の種類も多いが、それよりも様々な群落の手近に集まっているのが我が国として得がたい特徴である。麓には草原、麓から奥入瀬へかけての潤葉樹林も典型的である。その間にはササやぶがある。

ササやぶは潤葉樹林の下方、殆ど平地近くからブナ帯トドマツ帯に混じり、井戸岳では頂上のすぐ下迄分布している。ササは光の弱い所では生育不良になり樹木に負けるが陽所では地下茎を伸ばして密生し、その中では容易に樹木の芽生の発育を許さない。それで現在ササやぶになっている所は昔に野火・伐木・山崩れなどで一時裸地がかった、主として斜面の地域である。然し周囲から樹木が押しよせて来ると結局はその下になり次第に弱つて場所を譲ることになるのだが、それ迄には数十年乃至数百年もかかる。但し馬が入り込んでササの若芽を食うと割合速く退治される。酸湯から麓へ行く途中のブナ林などその好例である。

ブナ帯の上はトドマツ帯である。トドマツは石倉岳の西斜面その他諸所密林をなしている。酸湯附近でも昔は密林をなしていたらしいが温泉開発三百余年来、附近の木は皆伐られ、跡にはササやぶから更にブナ林に変わりトドマツは徐々にその間に伸び出している。

トドマツ帯の上限はハイマツ帯である。若し八甲田山がもう一千尺も高いのならトドマツ帯もまだまだ高い所まで上つている筈である。それは山頂附近は標高が低くても風当たりが強く、樹幹の伸長を阻害する。所がハイマツは強風にもよく耐える。勿論中腹の風の弱い裸地では、ハイマツの発育が一層よく2m以上の立ちかけた形にも発達するが、中腹では樹林に被われるので只山頂附近の樹木の無い所を楽に占有するのである。言わば山腹を追われて山頂に安住するという消極的な分布である。但し自分よりも丈の低い矮生灌木の密生する所で伸び出すと、それ等の上に枝を拡げて陰にする。それで可憐な高山植物に対しては横暴振りを発揮している訳である。然しまたハイマツに

庇護されて育つヒメイチゲ・ミツバオウレンなどもある。

大岳その他は火山であり、噴出当時は勿論裸地であつた。その表面は岩石か岩屑であるが、地形によつては沼も出来、湿地もある。こんな所へ種々な植物が移来したのである。ガンコウラン・コケモモなどの漿果は鳥に運ばれたが、最も働いたのは風である。私は嘗て春の硬雪の時、大きい雪塊が大岳の頂上から強風に飛ばされて井戸岳の中腹まで吹上げられたのを見たことがある。強風の時には硬雪でなくとも、秋に出来た果実や種子は割合容易に運ばれ易い。然し風による散布はそう万遍にはゆかないから、例えばカライトソウは岩手山の方から梯ヶ峰まで分布し、コクマサは高田大岳まで来ているが、大岳にはまだないなどというむらがある。

何れにせよ噴火の止んだ若い火山に先づ生育するのは蘚苔や低い草本灌木である。樹木は谷合いの風の弱い低い方から上へも横へも拡がつてゆく。高田大岳では幾つかの谷が放射状に拡がつており、谷合いは下から樹木が上つており、尾根では上からハイマツが下つているのが匪徒遶辺からよく見られる。大岳では噴火口の東側のやや低い縁の所から樹木や矮樹が押しよせ火口内の南側に拡がり始めている。

兎に角八甲田では樹木はまだまだ高い所まで上り得るのであるが、頂上附近の風当りの強い所は矮樹と灌木とに占められているのである。矮性灌木の分布で特に面白いのは岩高蘭である。これは雌雄異株で春雪の早く消えた所で開花受粉する。雄花は紅色三瓣の小さな花で雌花は余り目立たないが、早く雪の消える所だけに分布し、夏、漿果を熟すのである。雪の八甲田が春黒くなり始める所には岩高蘭が多い。

大岳その他のザラザラした岩屑裸地にはイワブクロ・イワギキョウなどがあり、熔岩上にはムントリスミレ・イワヒゲなどもある。また雪消えの早い所にはヒナザクラ・ミヤマリンドウ・チングルマ・イワイチヨウなどがある。大岳の東北斜面は雪消えが最も遅く、所謂駒の雪となり、上記の植物がよく分布する。或る人がヒナザクラを青森へ移植した所、翌年は一夏の内に三回新芽が更新して開花結実を重ねた。原地では雪消えが遅く寒いので一回が漸くなのである。晩雪地の植物分布も中々面白い。駒の雪は年によつては消えないこともあるが、時には案外早く無くなることもある。この時の雪消えの跡を中心の方へ見てゆくと、ヒナザクラや禾本なども生えなくなつた晩雪地には黒色

の蘚が生えており、それより低い所は岩屑だけの裸地である。此所は何年に一回しか日の目を見ない所なのである。

次に八甲田で面白いのは湿地の群落である。殊に睡蓮沼附近と毛無岱とによく発達している。睡蓮沼のは平坦な所へ沢の水が停滞して出来たもので、段階をなし泥炭層が2mも厚くなっている所もある。湿地の表面には水蘚の所もあり湿草の所もある。湿草は諸所水溜りの岸から伸び出してその縁を高くし、大小の沼を作っている。また草の根がからみ合つて沼の中へ岬のように伸出し、浮島を作っている所もある。バス停留場の睡蓮沼というのは、以前には長沼と呼ばれたもので、その東隣に本当の睡蓮沼がある。このスイレンは高山性のヒツジグサであつて、花が受胎すると水面まで伸びて長い花梗が螺旋状に巻き短縮して花を水底へ沈下させるのがよく見える。この附近の沼岸にはヒメシヤクナゲ・ミズガシワなどが生育する。

毛無岱は上下2段をなし、前後2回流出した熔岩の台地である。排水がよくないのでキンコウクワを主とした草原地となり、窪地が沼になつた所もある。殊に下の岱では草が所々突き出して藪を作り、水溜りを沢山に仕切つて不規則な苗代を作つており、上の岱の下り道からも見下ろされ神様の田と呼ばれている。此所にはオンヨロソウ・エゾミズナラなどがある。

毛無岱の草原は長く樹木の生育を許さなかつたのであるが、ハイマツの種子が飛来して発芽すると徐々に拡がり、それを足溜りとしてトドマツの種子が発芽し、此頃では相当発達した叢も多くなつた。諸所樹島をなし特殊な景観をなしている。

湿原はこの他にも平坦な地形の所に多数発達しており、その或ものは水蘚を主とする。水蘚には雨水で育つ所謂高層沼野性のものは少く、割合鉱物質に耐える種類が多い。そして其上にはモウセンゴケ・ツルコケモモなどが生えている。

八甲田山は田茂瀨岳を外輪山の一部とした大きい火山塊の中に更に大岳その他の小火山が出来たもので大小起伏、山あり谷あり溪谷あり、地形極めて複雑であるのでその上に発達した植物群落も多種多様で、時代と共に変遷し、現在は吾々の目撃する状態までに進んだのである。将来人手が加わらなければ樹林は益々拡がり笹やぶは狭まり、トドマツ帯は上下へ一層幅広くなり、ブナ帯も下方へ拡がって来る可能性がある。但し気候の変遷や地形の変化もあり、完全に落着いた林相とはなり得ないものと思う。

月山の植生

山形県立楯岡高校

結 城 嘉 美

羽前の名峯月山は海拔1979.5m、第三紀の基盤上に噴出した安山岩からなるアスピーデ型の火山である。主峯は南北に長く、対称的になだらかな山背はその名の如く月の面をほうふつさせるものがあるが、東西の両面は甚しく不对称で西側は爆裂と浸蝕によつて断崖状をなし東側は台地状に張り出して1500mの線で立谷沢川、烏川の溪谷に落ちる。このような山体に対して冬季の卓越風は西北方から吹きつけ西斜面では植生を破壊し東斜面には断熱膨脹によつて物すごい雪をもたらしこととなる。このため多量の残雪はカール状の地形と相まつて他の諸高山に見る雪溪とは形を異にして、巾の広い雪田となる。盛夏の候に1500m以下の地にもなお多量の雪を残し、数個の雪田は9月下旬の新雪を迎えるまで消えないでしまう。このことは月山の極めて特異とすべき点で、植生に及ぼす影響もまた甚しいものがある。

月山の山地帯はいうまでもなく日本海型ブナ群団即ちブナ=チシマザサ群集であつて、その高木限界は各斜面共概ね1300~1400m(志津登山口の石跳川では1150m、羽黒山口では合清水の1250m)にある。この群集の高木層も800~900mまではミヅナラを混え、その上部に至つてブナの純林となる。また土地的の極盛相として沢通りの湿潤な運積土にはサワグルミの優占する植生を生じ、沢頭の崩壊新生土砂上にはオオイタドリ=ミヤマシシウドを主とする大形多巡草本の大群落を見ることが多く、このようなところに先駆木本として下方からはミヤマカワラハンノキ、上方からはヤハズハンノキの侵入する過程を見るのは興味深い。なお、この群集におけるササ層は低高度にあつてはチシマザサに代つて低地性の種類となる。現在ササの分類はあまりに微に入り細に入り過ぎて混乱を極めておるために、初原的な分類に従うとチシマザサ *Sasa kurilensis* Makino et Shibata に対してこのものはチマキザサ(又はクマイザサ) *Sasa paniculata* Makino et Shibata である。チシマザサは程は肉が厚く強靱で筍をとる種類で、特に当地方では月山筍といつて有名である。これに対してチマキザサは程が比較的細く直立し筍も用をなさない。葉は広く程の上部に9枚も集まつてつくからクマイザサの名が出たという。またこの葉がチマキを包むところからチマキザサ



月山東面の遠望（8月12日の残雪）念仏ヶ原1060mより

の名もある。このササの種類によつて杉の造林の適不適がきめられることが提唱されているので（鈴木時夫氏）今夏は同博士と共に特に注意して調査を試みた。その結果は姥沢登山道においては低地の笹も1400mのブナ高木限界まで登つており、高地のチシマザサも700~800mまで下つてきており、姥沢小屋附近（1200m）では両者5分5分でさくそうしている地域も認められは可能であった。然し大きく見てその限界を認め利用することある。

次に高山帯は、これも他の諸高山と等しくハイマツ＝コケモモ群集を基調とすることは勿論であるが、月山においては気候的にまた人為的にハイマツを欠く植生が占める地域が大部分である。即ち人為的には閉山以来数百年の間、山が榮えるに伴つて頂上附近の燃料であつたことである。従つてこの山の登山道を往復したのみでは全くハイマツを認められないといつても過言でない。一方気候的には、西面においては風蝕による植生の破壊があり、東面では残雪によつて侵入がはばまれることである。ハイマツ林は尾根筋の雪の少いむしろ風衝地に発達するもので、あまり積雪を好まない。そのために姥岳頂とその西南面（1669.7m）や、四谷川左岸尾根の清川行人小屋へ通ずる旧道附近（1700m）にはハイマツの樹海を見ることが出来るし、紫燈森の頂（1700m）その他尾根筋には稚樹の侵入が認められる。したがつてハイマツの下限即ち高山帯の下限は概ね1700mと見てよいと思う。このハイマツを欠く高山帯植生には、岩礫地の急斜面を覆うハクサンシヤクナゲ・ミネカエデ・ミヤマホツツジ・ミヤマネズ・ミヤマハンノキ・ミヤマナギ等の低木林（鍛冶小屋下の斜面1800~1900m）や、頂上を中心に風衝甚しい地を覆うイワウメ・ヒナウスユキソウ・ミネズオウ・コメバツガザクラ・コタスキラン等の群落、また残雪周辺適潤地のハクサンイチゲ、チンゲルマ・ハクサンオオバコ・イワイチヨウ・ヌマガヤ・ノガリヤスの類等の草本群落などがある。

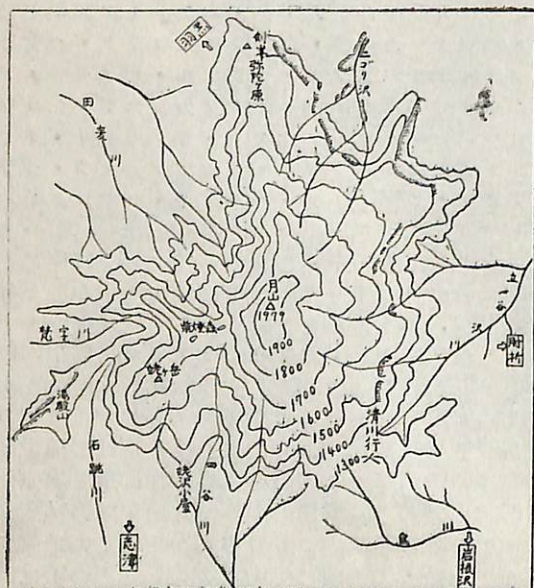
以上の山地帯の上限と高山帯の下限に挟まれた1400m~1700mのベルトが亜高山帯となるわけで

所謂針葉樹林帯としてのアオモリトドマツ群集を見出すべきであるが、日本海面諸高山（鳥海山・朝日岳・飯豊山）にならつて、この地帯に亜寒帯針葉樹種は全く認められない。この要因については或は風の影響に求め（安齋徹氏）或は過大なる積雪量に求めようと（四手井綱英氏・鈴木時夫氏）実験的研究が進められつつあるので、いずれ立派な結果が期待されよう。針葉樹林帯を欠くために、この亜高山帯の上下限が甚だ不判明であることは当然であるがダケカンバの下限を以て山地帯との境界を見出そうとする説にしたがつても概ね1400mとなる。月山におけるダケカンバ林は極めて孤立せる状態において、湯殿山口ではお月光東北方の斜面（1350m）、四谷川上流左岸尾根（1400m）、岩根沢口の清川行人小屋附近（1400m）、肘折口（1500m）等に見出される。

月山におけるこの帯の基本的な植生はチシマザサ＝オクノカンスゲ群集である。湯殿山の東南斜面の如きは広大な地域にわたつてこの群集が発達し気候的には1150mまで下降してブナ林に接している。脊丈を没するほどのチシマザサが密生して単純群落のようにさえ見えるが中に分け入つて見るとムシカリ・コシアブラ・ムラサキヤシホツツジ・ハウチワカエデ・ウラジロヨウラク・ハナヒリノキ・オオバスノキ・クロツル・ヒメモチ・ツルシキミ等の木本植物とオクノカンスゲ・ショウジョウバカマ・ツバメオモト・イブキゼリ・オオレン・アキノキリンソウ・ヒカゲノカズラ・シラネアオイ・ヒメイチゲ・ハリブキ・ゴゼンタチバナ・マイズルソウ・ヤマソテツ・タケシマラン・エツコウキスゲ等の草本を含みそのフロラは極めて多種である。つまりこの地帯には山地帯から上昇したもの、高山帯から下降したものにゴゼンタチバナ・ハリブキなどのアオモリトドマツ群集の標徴種を混えるためである。この気候的にまた土地的に安定したと見るべきチシマザサ＝オクノカンスゲ群集に対して、月山における特殊な植生としては、雪田をとり囲む好雪性植物群落と濕原植物群落とである。前述のように月山東面の積雪量は極めて著しいもので6月中旬まではこの地帯の殆んどが積雪下に没している。そしてこの頃に雪

から解放される地帯がチシマザサ=オクノカンス
グ群集の発達する限界と見てよいようである。そ
してこの線から各雪田の中心に向うにしたがつて
植物の生育期間が短縮されることになるので、盛
夏の候雪田周辺の植生を窺視するときは、最外側
にヌマガヤ・ニツコウキスゲ、最内側にアオノツ
ガザクラ・ヒゲノガリヤス、その中間がハクサン
イチゲ・ヒナザクラ・イワイチヨウ・チングルマ・
ハクサンオオバコ・イトキンスゲ等を組合せた数
種の群集が同心円をなして配列し、同一種にあつ
ては開葉から蕾・開花・結実に進んでいる状態はま
ことに面白く雪と植生の関係をあらわす幾多の好
資料がひそんでいることを思わせる。

濕原として著しいものは、頂上から羽黒山へ向
う7合目の彌陀ヶ原(1400m)と東北方に張り出
した広大な台地(1500~1600m)である。大小幾
多の池沼を有し、周辺はやはり中性の安定したサ
サ群集に囲まれて、概ねヌマガヤ=イワイチヨウ
群集を基盤とする。即ちヌマガヤが優占しイワイ
チヨウ・ミネハリイ・ミヤマイヌノハナヒゲ・ヒ
ナザクラ・キンコウカ・モウセンゴケ・ヤチカワ
ズスゲ・イワショウブ・シラネニンジン・ミズゴ
ケ類等からなり、沼池にはミズガシワ・ミヤマホ
タルイ・クロスマハリイ・エゾホソイ・ミヤマヒ
ナホシクサ・ヒメミズニラ等を見、彌陀ヶ原の一
小池にはネムロコウホネを産する。なお、濕原中
の岩礫地にはチングルマ・ネバリノギラン・アス
ヒカズラ等が侵入し、またミネカエデ・ハクサン
シヤクナゲ・ヤハズハンノキ等の低木林の点在す
るところとなる。



月山万年雪と植生との関係

山形地学会

安 齋 徹

昭和26~27年に亘つて、奥羽山脉中の船形火山
西部に対し、ブナ林伐採跡を針葉樹の造林地にな
すべく基礎調査が進められた。その目的樹種はア
テである。基礎の調査というのは大積雪地帯であ
るので気象的には積雪の精測があり、土壌の調査、
植生の研究、それに私の地学的調査が加わつたも
のである。その調査の時から山岳の積雪について
著るしく興味を覚えたので私は単独に日本海岸沿
えの月山に発達する万年雪の調査を開始したもの
である。月山の万年雪というのは毎年1500mから
1800mの海拔においても恰高原状を呈する緩斜面
上に数ヶ所の雪田が越年する現象なのである。

曾て我国の地学を創始されたジョン・ミルン氏
は早くもこれに着眼して、これは日本にあつた氷
河の遺跡ではあるまいかと論じたものであつた。
これについてはその後東京高師の大関久五郎教授
が現地を調査研究され、氷河とは関係のないこと
を論述されている。かくて時は流れ、去る26年の
3月、この万年雪は冬の最大積雪の際その深さが
何程あるかの測定を私の手で行つたのが端緒とな
り、最近では月山の雪水による発電や灌漑、はては
流谷の砂防計画、高山への造林研究へと汎綜合の
調査が大規模に行われつつあるのである。

東北の土地は日本海岸と太平洋岸とに挟まれて
出羽丘陵越後山脉、奥羽分水山脉、北上、阿武隈
山脉の三条が平行して南西から北東に連走してい
るため日本海方面から冬の季節風がやつて来れば
風は各々の山脉を次々と吹き越して西から東へ向
つて吹く、このために越後、出羽の山脉には雪が最
も多く積り、奥羽山脉はそれよりずつと少く、北
上、阿武隈などは極めて少量になる。このような
雪の多少ということは、植物にとつて雪の中に閉
じ込められている日月の長短により、いつしか適
性植物の分布に影響を及ぼすことは論ずるまでも
ないことであろう。然るに従来の研究では植物と
気候との連関を単に気温にのみ帰せしめ、雪の問
題を論究するに至らなかつたのである。私達は山
岳夫々に対する天然の植物分布について植物専
門学者達の論だけでは満足出来ないものが多かつ
た。

例えば奥羽山脉に突起している那須系火山の夫

々には高山植物としてのコマクサは分布しているが、ヒナウススキソウという日本海岸沿いの高山に普遍的分布を見るものはひとつもない。又ヒナウススキソウのある日本海岸の高山にコマクサはないが過年或る人はこれを月山に移植したところ今日著るしく繁殖しているのである。大自然のままに何故かかる偏った分布を来したかの問題は既成の学説によつて解決されるものでないことは余りにも反証が多いのである。

高山植物の研究などに至つてはその分布や種類の分類学的調査など単なる道程であつて、それら分類学的の植物が何故に夫々の分布を律せらるるかという広い着眼と研究とが伴わなければならぬと考えられる。今回の月山の研究は広い意味における月山の森林化を如何にして完成せしむべきかの課題なのである。

先ず何人にも一目注意させることは、奥羽分水山脉の諸火山には到る処にアオモリトドマツの群集が発達している。然るに越後、出羽丘陵の山岳並びに火山には総じてこのアオモリトドマツの分布がない。これ程判然とした林相の変化があるであろうか。斯かるアオモリトドマツの分布が偏つたのは、前にのべたコマクサの場合に通ずる原因はないであろうか、林業試験場の四手井博士はその原因を積雪の影響にあると信じており、最近月山を調査された神戸大学の鈴木時雄博士はそれを支持しておられるようだ。然し私達の場合から見ると積雪の研究をしたからといって、雪にのみそうした負担をかけることは望まない。植物の研究者は余りにも地盤、即ち地質というものから浮いているように思われる。何れその中に地学的見地からの分布論を述べたいと思うが、ここには月山の万年雪をとりまく植物相について鈴木博士の概説したものを紹介しよう。

月山の山地帯上限はブナとチシマザサ群集であつて谷間地形の処にはサワグルミとジユウモンジダ群集がある。若しも崩壊地があるところでは、そこにミヤマカワラハンノキとウバミソウの群集が侵入しオオイダトリとミヤマシシウドの群集が伴つてゆく。

それから偽高山帯ではクロウスゴとハクサンボウフウの群集、ハクサンオオバコとイトキンスゲの群集、チシマザサとオクノカンスゲの群集、ヌマガヤとイワウチワの群集、ダケカンバとミヤマハンノキの群集である。そして奥羽山脉に見られ

る亜高山帯のアオモリトドマツがない、即ち針葉樹林帯が欠けている。高山帯になるとイワウメとヒナウススキソウの群集、ガンコウランとコケモモの群集、ハイマツとコケモモの群集が主である。

この高山帯では万年雪田を中心として、これから遠く離れるに従ひ好雪性植物から嫌雪性植物へと移化し、そこにひとつの帯状分布が現出する。雪田の最後の近辺にあるのはアオノツガザクラでそれから離れて薄い泥炭のあるところはハクサンイチゲ、その他の凹凸地形で屢々湛水する部分にはハクサンオオバコとイトキンスゲの群集があり、その帯の標徴種としてはショウジロウスゲ、ヒナザクラである。また水はけの早い部分にはクロウスゴとハクサンボウフウの群集が見られる。更に一時は水浸地となつても常には適潤地である泥炭の分解地にはヌマガヤとイワイチヨウの群集が発達している。夏において全く水浸地にならない雪田の外周部はチシマザサとオクノカンスゲの群集が出来、それを界してゼンテイカが輪状に分布する姿を見る。

雪田を囲む植生は斯くして最外周に嫌雪性のハイマツとコケモモの群集となつているが現在の月山ではハイマツが人為的に伐りつくされ絶滅してしまつたが山の西側断崖である風上の地帯だけには残存している。

以上は雪田にからむ大要であつて未だ山の表土を構成する泥炭の詳細は論及されていない。これを地学的に見る時は泥炭によつて被覆される地帯と否とは植物種類に著るしい特徴がありその部分の植生の歴史を物語るもので、それらは月山に如何なる針葉樹の林相を計画し得るかの鍵ともなる可能性がある。山の地表は只その地質が侵蝕作用のみをうけるのではなく僅かながらも植物質の堆積が行われ、その泥炭層は年と共に発達して山の表土を保護する作用がある。尾瀬ヶ原の大濕原発達の問題は地学的領域に属することを私は主唱して来たが、各山岳の雪の侵蝕や地表の泥炭化も地学的問題であり、そうした地表の植生は今後の人為的森林を計画する基礎となることはたしかである。

農林省 林業試験場 青森支場

青森市沖館 青森営林局内 (電話青森6876番)

編集発行人 神 木 昌 司

早池峯を語る

青森交場 村 井 三 郎

高山で御来光を拜することは登山の極致とされ、郷里盛岡に居つた時はよく父に連れられて岩手山頂でこれを拜したものである。早池峯山頂での御来光は兩三度拜したけれども、今から考えれば未だ残雪の多い6月下旬の御来光が最も印象的であつた。それは当山から東方に閉伊川の凹所があり、その端、即ち宮古市附近の太平洋から太陽の昇るのが夏至の頃で最も莊嚴に感じられたからである。旭が時期が7月となり8月となれば太陽は次第に南に下つて、昇る位置が連山の一部からとなつてしまうからその莊嚴さが減ずる様である。御来光とともに印象的なのは周囲の高山の展望である。最もよく見えるのが北西方の岩手山で、その右遙かに八甲田連山が幽かに見え、西方奥羽山脉の南には須川岳連山が見える。北上山系自体では北に遠島山が、南東に五葉山が見える。若し御来光の際、雲海が発達して居れば以上の高山はその頂上部を雲表に現わしている。いずれの場合でも山頂と下界の差が明かに感じられ、その雄大さに打たれる程である。

早池峯は北上山系の中央に座し、その最高峯として1913.6mの標高を有する。地質は周囲全般が古生層(所謂秩父系)であるが、当山の本体から西に稜線沿いの鶏頭山一毛無森に亘つて蛇紋岩が発達し、南の薬師岳は花崗岩からなっている。地形は本山一鶏頭山一毛無森の線及び南の薬師岳連山の線、更に閉伊川を距てた北の青松葉山一サクトガ森一害鷹森の線が、それぞれ東西線をなし、従つて河川も閉伊川の如く東西流するものを主として所謂横谷を形成している。

早池峯に至る道路は沢山ある。現在では山田線が再開したから盛岡又は宮古から同線で平津戸に下車するのが最も便利である。平津戸一頂上間は約4時間を要する。他には東北本線石鳥谷駅で下車し大迫町を経て岳部落に至る道があるが、岳一頂上間は約4時間を要し且つ岳迄の行程が長いので稍不便であるが花巻市方面の人はこの道を選ぶ。更に釜石線遠野駅で下車し、上柳を経て大出に至る道があり、大出一頂上間は約5時間を要し、前者同様行程が長いが遠野市、釜石市方面の人はこの道を利用する。なお此の他に江繋から大出の上部に出ることも出来るが最も不便である。

早池峯は植物学上、東北地方で最も有名な且つ

貴重な高山とされている。古く明治初葉に郷土の採集家、須川長之助氏が当山に採集を試み、ロシアの有名な植物学者マクシモヴィチ氏の研究資料を提供している。更に同30年代に牧野富太郎氏を初め東京の植物学者の採集行があり、高山植物の豊庫として有名になつた様である。その後諸泰斗が来山されたが遂に昭和初期に文部省から当山の頂上附近南側が天然記念物として指定せられ、現在は平津戸口及び江繋口が川井管林署により、岳口が花巻管林署、大出口が遠野管林署により夫々管理保護されているのである。

当山の植物中、現在迄に知られている特殊植物を次に列記してみる。

特産種——ハヤチネウスユキソウ、ヤブヒヨウタンボク、ヒメコザクラ、ナンブトウウチソウ、ナンブトラノオ

南限種——ナガバキタアザミ、サマニヨモギ、エゾノツガザクラ、チシマフウロ、ナンブイヌナヅナ、ナンブソモソモ

北限種——ハリガネカヅラ、チチブシロカネソウ、ヒロハカヅラ、ユモトマムシグサ、ザラツキヒナガリヤス

珍稀種——カトウハコベ、オノエスゲ

なお最近、京大の北村四郎氏が蛇紋岩地帯には特殊な植物が生育し、これを蛇紋岩植物と称して居られ、当山の特産種並びに分布限定種が之に当ると論じておられることを附言する。

最後に植生状態を略述しておけば、山頂から山麓に向つて次の様に変化しているものと見るべきである。

(1)ハイマツ+高山植物(南側1400m以上、北側1800m以上)、(2)ハイマツ+コメツガ+アオモリトドマツ(南1200m以上、北1600m以上)、(3)アオモリトドマツ(南1200m上、北1300m上)、(4)アオモリトドマツ+ダケカンバ+ブナ(南北共1000m上)、(5)ブナ又はサワグルミ+トチ+カツラ(南北共600m上)。

此の内、特異な植生は平津戸口である。此所はヒバ(ヒノキアスナロ)の生育が極めて顯著であることと、ブナが殆ど無いこととで特徴付けられる。即ち(1)と(2)は前述の通りであるが、(3)アオモリトドマツ純林(1600~1500m) (4)コメツガ+ヒバ+アオモリトドマツ(1500~1300m) (5)ヒメコマツ+コメツガ+ヒバ(1300~1000m) (6)ヒバ+サワグルミ+トチ+カツラ(1000~600m)となり、(4)(5)においてはヒメコマツ→コメツガ→ヒバ→アオモリトドマツの4種の植生連続上の各段階がよく認められ興味深く感じられる。